

第27回小野十三郎賞受賞記念対談

詩集『ノックがあつた』からの

詩の広がり

受賞者・岡本 啓  
聞き手・近藤 久也

●詩は誰のために書くか

近藤 あらためて、小野十三郎賞の受賞おめでとうございます。

岡本 ありがとうございます。

近藤 こういうのは慣れていないので、いろいろお伺いすることをメモしてきました。岡本さんはこれまでもいろんな賞を受賞されていますが、賞の受賞は、岡本さんの詩作になにか影響を及ぼすことはありますか？

岡本 単純なことですが、いただいたときにはすごく嬉しい。それがまずあって、あとはそれぞれの賞には選者の方々がいらつしゃって、その方々が話し合つて決めるものだと思うので、その選者の方々にしつかり読んでもらえた、そういう気持ちになりますね。賞の名前と受賞者だけを眺めると、賞は神様から与えられるような感じもするんですが、結局選んでいるのは人なので、その人に詩集を読んでもらえた、そういう気持ちでそれぞれの賞にあります。

近藤 なるほど。授賞式の日には岡本さんが、授賞式は苦手だと仰つていたのが印象に残つていて、お聞きしたかったんです。それとちよつと繋がる話ですけど、私の感じでは、詩は自分のために書かれるものであるという、ひとつの詩論のような言説が昔からあります、岡本さんはどうですか。自分のために書くという感じはありますか。

岡本 自分のなかでも感じ方が変化してきているかな、というところがあります。書き始めたときは完全に自分のためでした。詩を書く前にフリーターで、定職に就いていなかったので、詩を書くことによってまわりの人、家族なんかも、何かをしているんだと認めてくれたところがあつた。詩を書くことで、自分の居場所というか、何かやっていることを見つけられる。それで、本当に自分のため、自分の人生のために書いていました。いままその延長線上にいますが、ただいつも思うのは、自分のために書くならもつと楽しいやり方がある。完成させずに言葉やイメージで遊んでいるときが一番楽しい。ただそれだけでは作品として形にならない。才能が溢れていて何でも書けるというタイプではないので、そこで人が読んでどう感じるかを考える時間が、創作のなかに今はかなりあります。

近藤 徐々にそうなってきた感じですか。

岡本 読んでいる人がどう読んでいるか考えるということは初期からあつたんですが、今のほうが、詩によつて現代人は何ができるかをより考えるようになっていきます。詩は、とくに自由詩は、日本社会のなかで大きな位置を占めていないと思いますが、詩は何ができるかという視点で書き続けることで世の中に知らせられることがあるんじゃないかと思っています。

近藤 一つのメッセージ性を持っているということです。

岡本 そうですね、ダイレクトなメッセージではないと思うんですけど、社会のなかで詩はこれまでもずっとある位置を占めてきた。それが今の時代には見えにくくなっている。

近藤 そうですね。

岡本 それでも実は、言葉が持つ感性的な側面みたいなものは、どんな人の言葉や文章のなかにも実は隠れている。その力を、自分が詩作するときに、ふだん詩を読まない人にも「こういうものが詩としてあるんだよ」と伝えていきたい、という気持ちはありますね。

近藤 じゃあ今現在、詩を書かれるときは、ある程度読者を意識されているということですね。

岡本 一方で、具体的に読者を意識しているわけでもないですね。書いた自分自身が一人

で読んで、一人で満足するものだったらどんな書けるんです。でもそれだと誰も楽しんでもくれない。あくまでよく個人のなかで、詩は今の時代はこう書くべきだというものがある。ただ、それは周囲から影響を受けて考えるのです。そういう意味では、社会といえいいのか自分より大きなものによつて書かされているといえるかもしれません。

近藤 詩作するとき、『現代詩手帖』から依頼があったり、何かの雑誌から依頼があったときに、読む人はどんな人だろうかと、そういう意識はありますか。

岡本 ある程度あります。『現代詩手帖』だったら何書いてもいいや、という気持ちはあります（笑）。自分が本当に書きたくて、別に誰も読みたくないようなものでも、『現代詩手帖』なら書いていいかな、と。

近藤 今回の詩集を最初に手に取らせていただいたとき、『ノックがあった』というタイトルがすごく良いと思いました。

岡本 ありがとうございます。

近藤 それから読ませていただいて、「あとがき」でも触れられていましたけど、その「ノックがあった」っていうのは岡本さんに對して、広い意味で世界から何かノックがあった、あるいは今の政治的な状況とかも含んだ、ある状況からノックがあった、あるいは

岡本さんが元々持つてられる、岡本さんの内側にある言葉からのノックがあった——いろんなふうに取りれるんですけど、作者としてはどういう感じですか？

●「はだかのことば」とポエジー

岡本 今言ってくださったものは全部考えているんですけど、特に自分の中で、詩を書き始めてからの驚きという部分では、自分が單にばつと書いた言葉、自分の中に元々あったと言つていいのかわからないけど、ばつと書きつけた言葉が、書きつけた途端に、自分以外の人が使つていくごく一般的な言葉になつて、それが自分に跳ね返ってくる。詩を書くまで創作をしたことがなかったで、詩を書き始めてからそこにすこし驚きがあった。そのニュアンスを込めたいなという気持ちがあった。

近藤 なるほど。他者からの反応ですね。

岡本 そうですね、自分の言葉が他者の言葉に変わってしまうという驚きですね。

近藤 今回の詩集の中の「鳴動」という詩の中に「はだかのことば」というのがあつて、それも気になったんです。この「はだかのことば」というのは岡本さんの詩の結構本質的な言葉なんじゃないかなと勝手に思いました。私はね、言葉は本来実在するものの例えであ

つて、言葉自体が元々比喩であるような感じを持つています。それに対して岡本さんが出している詩の言葉は、何か例えとか喩になる以前の、もつと原初的な言葉、音に近いような感じ、そういう感じを持つたんですけど、その辺はどうですか。

岡本 この「鳴動」の中でもそうなんですけど、「はだかのことばなんてあるのかな」と書いていて、「はだかのことば」といえるものがあるかどうか、それについて今も迷つている状態です。「はだかのことば」——純粹なことば、ことば以前のことはようなもの、それは詩とかポエジーとか、そういうことに關わることをかと思うんですけど、そもそも詩に興味がなくて、突如、二十代後半から書き始めた者としては、ポエジーというものに対して書き始める前にすごく不信感があった。そんなものあるのかつていう（笑）。

だけど、詩を書くときに、ポエジーが世の中にあるんじゃないかと思つた方が書きやすいというのがあつた。そこで、これは一体どういふことだろうと、そう今も考えている最中です。言葉では表現できない詩、ポエジーみたいなもの。いわゆるプラトンのアイデアみたいなもの。それはやっぱり今の自分からしても、ちよつと何かうさんくさいもののような気がするし、だけど同時にそれは詩を書か

せる力になっている。書き始めてみるとたしかに現実には、そこに詩があると言っちゃってから深まることがあるな、という実感もあります。あるかないかわからないもの、「はだかのことば」というのは、そういうものの別の言い方でもあるかと思っています。

もうひとつとちよつと違う話ですが、自分が詩を書き始めたとき、二〇一一年ぐらい、朝日新聞のウェブ版に、ボクシングの内藤大助さんの、いじめられている子へのメッセージといった、多分インタビューの書き起こしが載っていました。その記事のなかに、自分がすごく幼い頃貧しくて、周りからボンビーみたいな貧乏という言葉逆にしたようななかにかわれ方をしていて、なんで自分がそういうことを言われるのかわからなかった、というエピソードがあった。

それを読んだときに、内藤さんのつらい幼少期の話ではあるんですけど、自分がいじめられている理由がわからなかったというところに、すごく詩的な力を感じた。それは別に詩として書かれたものじゃなくて、単なるインタビューを書き起こして誰かが編集したもののなかに力があるなと思った。そういうことばが「はだかのことば」だという側面もあるかと思っています。

近藤 僕の印象では、今岡本さんが話された

ように、前提として叙情というのを置いている詩であるように読めたんですね。岡本さんが発せられる言葉は、何か利根的な言葉、それがひよつとしたら叙情的でない言葉なのかもわからないけれど、何か言葉の儚さみたいなものが自然にぱつと出ているような印象を受けました。岡本さんと前回お話ししたとき、詩のリーディングをよくされているっておっしゃっていたんですけど、リーディングをよくされる詩人は、そういう言葉の瞬発的な力に重きを置いておられる。僕はそういう印象です。そういう面はあるんですか。

岡本 そうですね、リーディングをするようになったのはここ最近で、この詩集だと特に声にして読んでいる詩が多いので、今、近藤さんがおっしゃられた通りなんだと思います。ただ元々リーディングが実はそんなに好きではなかった。書き言葉と読む言葉は、全く違う種類のものじゃないですか。だから、書き言葉を書き言葉として目で見たとときの良さを最大限生かした方がいいんじゃないかという考えはあるんですけど、ただ、詩を書き始めたときに、白石かずこと吉増剛造とかの世代の詩人に憧れて書いていて、彼らの詩と生きた方に憧れているところがあるので、避けては通れないだろうと、それでやっているところがあります。

近藤 なるほど。岡本さんの詩って初期の吉増剛造さんの『黄金詩篇』とか、あのへんの言葉の感触とよく似ているなと思ったんですけども、それはやっぱり、言葉そのものに対する不信、言葉が持っている比喩みたいなものをあんまり信用されていない、そういう面があるんですね。

岡本 そうですね、比喩以前にそもそも詩をあんまり元々信用してなかったということがあります。だけど、それが最近変わってきた。詩もいいもんだなと思い始めたのは、子供が生まれて、子供が何かこっこ遊びをして、河原で石とかをパンに見立てて遊んでいて、実は詩というのはそれを大人になってもやっているだけなんじゃないかっていうふうに思いました。というのも、石の外側にパンというものの概念をかぶせて、あたかもそれをそのように遊ぶということ、それを大人は言葉だけでやっている。

今コーヒーがここにあるんですけど、コーヒーをたとえばブラックホールに見立てて、それでブラックホールを手を持っている遊び、そういうのをやっているだけだと思うと、すごく自分にとってもポジティブに、詩は子供の遊びの延長みたいなものと捉えられた。なおかつそれで思ったのは、人間の言葉は、比喩を重ねていくことによって、すごく細分

化していった。比喩の力で新しい言葉を生み出していくにつれて複雑性を増していって、分量自体も増え、今に至ると思うと、詩というのはもうとにかくとんでもなく大事なものだというふうに、最近思うようになったんですね。

近藤 元々僕なんかの感覚では、言葉も最初にそれが人間の口から出たときは喩えだった。このベンというのもベンという一つの喩えです。それから詩だった。けれども、それがもう蔓延して使い古されてしまう。これは詩じゃなくただの言葉になった。そういう感覚を結構持っているんですね。

岡本 きつと考え方は同じだと思うんですけど、自分の場合は近藤さんの感覚にたどり着くまでにかなり時間がかかった、自分はそういうタイプだと思います。

### ●言葉の表記をめぐる

近藤 あと、岡本さんの以前の詩も読ませていただいたんですけど、詩の表記、行の上げ下げとか、それにとどまらず円形にされたり、いろんなことを駆使されますね。それは特別な意図があつてされているんでしょうか。

岡本 詩の表現は、今自分たちが行分けと散文の二つに分けてやっている以上の広がりがあり、本来的にはあるような気がしています。例え

ば先ほどの内藤大助さんのインタビュー記事とかもそういうものです。そういうことで詩集ごとに何かいろいろやりたいなという気持ちはあります。

あとは元々詩を書き始めたのが、例えばさっき言った吉増剛造、白石かずこ、フリージアズの関連で、さらに北園克衛の視覚詩とか「未来派」とか「ダダ」とか、そっちの方に興味があつたんですね。そういう詩は聞くものであつたり、視覚的にも本を読むというやり詩を見ると感じる。そういう意味では詩の周辺、ちよつと変わったことに興味があつて、なかなか「読む」にまで至らなくて、ようやく第一詩集を出す数年前ぐらいから、読む詩を読むようになったということもあります。

近藤 面白いなと思つたのは、詩の言葉が印刷されているその上に、シミとか、何かワーツと被さっているみたいなのがありますよね。あれはあんまり見たことないなあとします。詩集の装丁も含めて、言葉と並行して重要だという意識があるんですね。

岡本 今回だけは自分がすごくファンの服部一成さんというデザイナーの方に装丁とドローイングをしていただいたんですけど、以前の三冊は自分で全部、装丁と組版もやりました。それは、読者が詩と最初に接触する場所

が詩集という本のかたちであつて、それが特別な体験になつてほしいという気持ちがあります。

言葉というものの特徴は、コピーができてパソコンでも印刷してもどっちでも読めるという点にあると思うんですけど、やっぱり全然違うんですね。紙で表面がザラザラしたところで読むのや、すごく見にくい文字で書かれたのを読むのでも、受け取る感覚が全然違う。そこにやっぱり立ち返った方がいいんじゃないかなという思いがあつて、自分でやっていました。

近藤 そういう美術的、現代アートのなものにも以前からかなり興味を持たれているわけですか。

岡本 大したことではないんです。本を読むのが好きというより、本の外見が好きだったんですね。だから、やれるならやろうみたいな感じで。

近藤 そういうのつてありますね。昔、レコードの時代、僕らはよくジャケ買いと言っていましたけど。詩集もそういうのがあつていいと思いますね。話がちよつと前後しますけど、授賞式で岡本さんは小野十三郎の詩を二篇、朗読されましたね。すごくいいなと思つて聞いていました。岡本さんの詩と小野さんの詩、直接は結びつかない。小野さんの詩は、

その風景をして語らせる、そういうリアリズムの基本みたいなところがあって、戦後の現代詩のベースになっているような気が僕はしているんですけどね。その辺はいかがお考えですか。

岡本 自分は小野十三郎に全然詳しいわけじゃなくて本当に詩集を一冊読んだぐらいで、直接の影響は受けていませんが、間接的な影響はすごく受けているんだろうと思っています。

もうひとつ小野十三郎といえば、大阪文学学校に行つてすごく自分としては嬉しかった。学生の皆さんの自己紹介とか式の挨拶のときにそれぞれ喋りすぎないようにストップウォッチで測っていたり、ユーモアがあつて、本当に気持ちのいい空間で。それでちよつと思つたのは、自分が詩集を出す前に『現代詩手帖』に投稿していたとき、詩を一番取つてくださったのが福岡健二さんでした。亡くなつてしまつたんですけど、彼も国立という東京の郊外のところで、年齢とか出自とか関係なく来た人が来ていいよ、という詩の塾、皆で詩を書き合うということをずっとやっていました。そこに参加したことはなかつたんですけど、大阪文学学校にもその匂いを感じた。

文学というのはいつ始めてもいい、どんな年齢で始めてもいいもので、それを実現する

ための助けになる場所はすごく大事だと思うんです。それで大阪文学学校に行つて、ちよつと福岡健二を思い出すところがあつた。小野十三郎の詩を読んでいても、福岡健二を思い出すところがあるのは、市民性と言えはいのか、いわゆる小市民というか一般市民というか、普通の人であることをすごく大切にして書いていた。それでちゃんと現実のこの地平に立つて書く、今の社会の、世界の問題とか日本の問題とかを意識しつつ、普通の人としての立場から外れようとしないうところ、そこにすごくリスペクトがありますね。

近藤 私も福岡健二さんとは、十年ぐらい前かな、ここの文学学校に來られて会つた。そのときは確か高階紀一さんとか、「ガーネット」の関係だつたかな。奥様と一緒に來られて、何か映画のお話を主にされた。映画も一所懸命されてましたからね。映像が詩と密接に繋がっているのかなと、ぼんやり思つたんですけどね。

岡本 小野十三郎の詩も映像的ですね。

近藤 小野さんの後、お弟子さんって言つていいのか、長谷川龍生さんなんかはドキュメンタリーチックな詩を結構書かれていた。小野十三郎は静止している風景ですけど、長谷川さんはそれにさらに動きを持たせていると

ころが映画でもあるんだろうと思うんですけど、そういうのときさっきおっしゃつていた市民的な感じがあつて、何か近いような感じもしますね。岡本さんにこの間お会いしたときは南天堂の話とかもちよつと出ましたけど、「ダダ」とかも絡まつて、詩と社会性については、何か思つておられることがありますか。

#### ●日本の詩に欠けているもの

岡本 自分のことを叙情詩人だと自分では思つていて、叙情的なものからすごく遠い人間だと思つているんですけど、ただ、いろんな外国の詩祭とか、去年アメリカのアイオワに国際創作プログラムというんで数ヶ月滞在したんですけど、やっぱり日本の詩に政治的なもの、社会的なものがちよつと足りなさげなんじゃないかなという気持ちはあります。

外から眺めると自分はいわゆる日本的な詩人ですから、社会にむけてなんてあんまり書きたくはないんだけど、他の人があまりにも書かないからちよつとしようがないなという気持ちはあつて。小野十三郎がドシンといればよかったんですけど、もういなくて、優れた詩人もどんどん亡くなつていくので、誰かそういうのをやつてくれる詩人が何人かきちんとあればいいんだけどな、とは思つてます。それで自分がちよつと何か書くべき瞬間があ

つたら書かなくてはいけないのかなという思いはありますね。

近藤 じゃあ今後岡本さんの詩に、そういうのがうつすらと反映されてくるかもわからないですね。

岡本 自分はわりと外の世界の影響を受けやすい単純な人間だと思うので、どんな場所に自分が置かれるかによって、詩が自然と変わってくるかなとも思います。

近藤 『現代詩手帖』に投稿されていた時から、今現在はいよいよ詩に対する想いは変わってきていますか。

岡本 そうですね、今はもう、自分には詩しかないと感じています。当時は何もなかったんですけど、詩を書いて死んでいくんだろうなという気がします。

近藤 すこい覚悟。

岡本 覚悟というか(苦笑)、他に何もなくて、詩があつたというだけだと思うんですけど。

近藤 あとちよつと細かいお話で、僕も文学学校で詩の講座のチューターをしているんですけど、その受講しきておられる方で、詩を実際に書く場合に、さっきのお話じゃないですけど、ちよつと頭一つ落としたり、行のお尻を揃えたり、句読点をどう打つか、あるいは打たないとか、そういうことにすごくこだわの方が結構多い。僕はわりとそんなのは

無頓着な方なんですけど、岡本さんはそういうのはこだわりますか。

岡本 なんだかんだ、めちゃくちゃこだわらんじやないかと思えます。この『ノックがあつた』に入っている「全ての音がこで聞こえる」というのはかなり長い詩ですけども、このページを開いたときに、どこからどこまでがパツと見開きに入っているか、内容は変わってなくても位置をすぐくずらしたりして、自分としては一番最適な形にしたところがあります。

近藤 やつぱりその見え方、詩の風景が、トータルでの詩という感じ。

岡本 それを読む人が、言葉に触れる瞬間、その瞬間に一番情熱をかけたところがあります。

近藤 今後その岡本さんが考えられている詩作の展望みたいなものを、ちよつとお聞かせいただければ。

岡本 展望……あんまり何も考えてないんですけど、今は何か真剣に書くこう、本当に自分の好きなことを書くこうと思うと、閉鎖感のある暗い詩ばかり書いていますね。これは多分今の時代がどこに向かうのかが、自分としてはすごく不安だなというのがあって、それがそういう詩を自分に書かせていて、あんまり誰も喜んでくれないだろうなと思いがら

書いていますね。

近藤 詩集はもちろん今後もあるでしょうけど、そういう岡本さんの考えている詩に対する思いで、詩論的なものも出したいというお考えはあるんでしょうか。

岡本 いずれは出したいという気持ちはあるんですけど、まだこーい、二年では無理かなと思います。詩を書き始めた当時に入沢康夫の『詩の構造についての覚え書』を読んで、だいぶもうこの理論は正直古いんじゃないかって当時ですら思ったんです。実際古く書かれた構造主義的な解釈というやつは、ちよつともうあまりにも今の時代より前の時代のものの方じゃないかなという思いがあつて、そういうのをアップデートする必要は絶対あるなとは思っているんですけど、ちよつとこーい、二年で完成する気は全くしてないですね。

近藤 そうですか。それはでも、将来楽しみです。

岡本 長い目で見えていただければ。

近藤 よく一般的に、詩を書く者は詩論を書かないといけなと言われたりして、並行してやっているひともいますね。雑誌とかに、そういう散文的なものも実際に発表されているんですか。

岡本 詩論というほど固いものは発表してい



ないです。エッセイ的なものになっていて、ちよつとまだ小野十三郎に顔向けできない感じのものです。

近藤（笑）。大学でしたか、詩の講座を持たれている。

岡本 そうですね、非常勤で教えています。

近藤 それは実作講座みたいな感じですか。

岡本 講座は詩論という名称なんですけど、実際は実作をしてくれという大学からのオーダーでした。ちょうど文学学校の授賞式で読んだ小野十三郎の二篇を紹介したりもしています。今の学生は、自分から遠く離れた出来事、例えばガザの問題とかに興味心はあると思うんだけど、詩でどうやって表現すればいいかはすごく難しく感じています。

授賞式で読んだ小野十三郎の「一匹の水牛が道を横切る」という詩は、ベトナム戦争を日本にいながらど書くかという問題が背景にあります。語りの主体が既に死んだ者として登場していて、それでフィクションであることが前提として示している。そのフィクション性があることで、その現場にいない者であつてもベトナムのことをためらわず書くことができる。それで、こうやったら書けるんだよということを生徒に伝えたりしましたね。近藤 大阪文学学校でもね、やっぱり元々は小野十三郎さんの作った学校ですから、詩が

中心だったと思うんですけども、最近では朝井まかてさんとか、小説を目指される方が結構多い。やっぱり小説というのはちゃんとした大きい賞があるし、経済的にも得られるものがありますから。詩全般に対して、今後の詩に対して、詩を書きたい人に対して岡本さんから言いたいようなこととてあります。こういう魅力がありますよとか。

### ●詩は減びない

岡本 そうですね、自分としては、小説の読者を詩が、つまりわれわれが奪つてこなきゃいけないという、すこし乱暴な意識はあるんですけど。詩を書きたい人に何か言いたいこと——。

近藤 今実際そんなに多くないじゃないですか、詩を書きたい人。この文学学校でもそうです。だから詩の宣伝するんじゃないですけど、詩は今後どういう方向に向かっていくのかなというのは、僕なんかも気になる。

岡本 この状況にたいして日頃、考えているんですけど、まず大前提として、詩が減びることはあり得ないという気がします。言葉と離れて詩があるわけじゃないので、言葉を使う限りにおいて詩的な何かは常に発生し続ける。

そもそも日本は詩の国であるというのが最

近自分のよく言うことで、俳句短歌があるじゃないですか。俳句短歌というのは誰でもある程度ちよつとやれば、形としては完成作品として提出できる。俳句短歌は日本において、詩という名称よりもひろく認知されていて、多くのひとはそれが詩だつてことに気づいてないですけど、当然外国から見たらとんでもなく詩なわけで、それがもう新聞とか至るところにある。だから、ものすごいこの国は詩の国なんだぞということをまず言いたい。

ただどつちかっていうと詩と小説が分かちやつてゐる。日本の小説家は、世界の中でも、小説しか書かないとい作家がかなり多いんじゃないかなという気がしています。小説と詩を同時にやり、読者も同時に読むという世界、この日本にそういう社会が何と戻つてこないかなという、そういう気持ちはありますね。

近藤 実際に詩を書かれる場合、五七とかそういうのは日本人ですから、自然に出てくる感覚はありますか。

岡本 もちろん全くないとはいえないんですけど、多分世代の上の方と比べてかなり減つてきていると思います。昔、静岡連詩の会というので、町田康さんが、五七は勝手に出てくるもんだからねって言っていて、いや俺はそんなことないけどなと思いました。実際、

谷川俊太郎の翻訳絵本とか、そういう五七ではない日本語で育ってきていますから。五七は、自分の中では人工的に生み出そうとしないうと、なかなか出てこないリズムではあるかなと思います。

近藤 現代詩は、短歌とか俳句の世界とあんまり関わりを持ってこなかったということがありますね。昔、岡井隆さんとかがいろいろ書かれたりしましたが、広義には同じ詩なのに、短歌俳句とのつながりが確かに薄いところがありますね。

岡本 最近さっきの国際創作プログラムでタイの詩人と話したんですが、タイも自由詩が弱くて、形式がしっかりした詩、伝統的な詩がすごく強いらしいんです。でも他の東南アジアの国々はわりと自由詩の方も強くなっている、それぞれ伝統的な詩型があったけれど、自由詩の方が強くなっている。

タイの詩人と話して思ったのは、やっぱり植民地化されたかどうか。欧州や日本に植民地化された国というのは、自国の伝統的な詩型が破壊されて、より早く自由詩、いわゆる現代詩的なものに接近して、それが広まっているところがあって。そういう歴史的な観点に立てば、俳句短歌がめっちゃ嫌いだったんですけど、俳句短歌というのむしろ日本にとっては大事なもので、これがある

ということば、それだけで尊いことなんだと最近ようやく思うようになりました。

近藤 私も高校時代からもう古典が苦手で。

岡本 全く同じです（笑）。

近藤 今になって後悔しているんですけどね。でも確かに、そういうのが重要なと後で気がつくんですね。話があつちこつち行きまいたけど、そろそろ時間です。このへんで終わりたいと思うんですけど、最後に何か詩について一言おっしゃっていただければと思います。

岡本 詩について——。今、文学学校の方でも小説が多いと仰っていたけど、詩ってやっぱり簡単ではあると思うんです。真剣に取り組むとめっちゃ難しいけど、自分と自分の作品との距離感というか、それがすごく近くて、誰でも手を伸ばして数行書けば、それが詩になるという、人間にとつてもものすごく身近なもので、より良い作品をと思えば特別な学校があつたしきに訓練が必要ではあるんだけど、それでもやつぱり小説と比べるともうちょっと気軽なものだと思います。これを何とか日本社会で広げたい。

近藤 そうですね、今のお話、すごくいいお話で文学学校に來られている皆さん興味を持たれるお話だと思うんです。ただ、詩は自由すぎるといふか、とつつきがすごく悪いと

いうか、そういうもんであるという印象を僕も持っている。岡本さんはまだ年齢的にも若いですが、これから詩を広げていていただける方だと、すごく期待しておりますので。ご活躍をお祈りします。ありがとうございます。

岡本 ありがとうございます。皆さんにどうぞよろしくお伝えください。

於 大阪文学学校 二〇二五年一〇月六日